

## 「お米の総合流通サービス業」に徹し、逆風の時代に着実な右肩上がり成長を実現



中島良一社長は「棚田米」の取り扱いに力を入れる

福岡農産(福岡県田川郡川崎町)は、主食米はもちろん、酒、みそなどの原料米、有機米の輸入、棚田米などを扱う「お米の総合流通サービス業」を展開している。外食産業、スーパー、酒造メーカーなど取引先ははたしてトップクラスの企業ばかり。この分野では、文句なしに県下一の企業である。

創業は1970年。愛知県で米穀商「中島商店」を営んでいた中島良一社長の父親が、田川に3300坪の広大な土地を入手。九州工場を立ち上げた。程なく国の過剰米処理に遭遇し、相場が暴落。大損害を被った。そこで、九州工場を「中島商店」から分離独立することになり、東京でアパレル会社で勤務していた中島氏が呼び寄せられた。

「いわゆるイターンですわ」と笑うが、当時26歳、経営には全くの素人だったことが、結果的には「吉」と出た。元商社マンの会長が東京から指示、分析をし、徹底的に財務を叩き込まれたからだ。「5年ぐらいいは悪戦苦闘でした。取引先の開拓や人脈づくり。何もかもが手探り状態でした」

度重なる法改正により、米市場ほど激変した市場はない。だが、中島氏は常に、そうした動きに機敏に対応してきた。88年には小売業の許可を取得。95年の新食糧法成立により、米を作る自由、売る自由が保証されると、いち早く新生産システムを構築し、主食精米能力を大幅に増強。96年には、米穀卸売業登録。卸業にも歩を進めた。

有機米の取り扱いも、政府の動きに先行した。知人の紹介によりカリフォルニアで誠実に有機米を作っている生産者と知り合い、さっそく輸入を開始。01年、日本で新JAS法が制定され、有機米栽培に第三者の認証が必要となったが、中島氏は97年4月に米国の第三者認証機関OCIAの認証を取得している。

最近では、棚田の米を積極的に買い取ることも始めた。棚田は日本の水田の約1割を占め、日本の生態系、環境保全に欠かせないものの、積極的な保存努力が必要だからだ。

また、「魚沼産こしひかり」に代表されるブランド米に関する不当表示問題にも強い関心を示している。「不当表示をすれば、結果的に自分の首を締める結果になるのは必定なのです」

正直な商いに徹するのはもちろん、精米のトレーサビリティにも万全を期している。

「ISO9001:2000」を取得。ウェブサイト「有機米屋」も開設している。

現在、年商約50億円。「まず100億円企業を目指す」ことが中島氏の目標だ。というが、この姿勢が続く限り、その目標は、ごく近い将来、必ず実現できるはずだ。

